

魔法使いお便秘小説誌



# 不機嫌な死神

— 成人向け —  
**R18**  
ADULT ONLY  
18歳未満  
購入・閲覧禁止

魔法使いお便秘小説誌  
「不機嫌な死神」

目次

第一話：不機嫌な死神	……8
第二話：不相応な神童	……64
第三話：湿地の女王	……75
第四話：宿主の摂食	……138
第五話：砂底の盗人	……146
あとがき	……166
奥付	……174

小説：                    灰屋ちゃん  
表紙：                    はやん  
口絵：    はやん   リット   Mixa  
挿絵：    はやん   リット   Mixa

## 不機嫌な死神

乾いた草原の真ん中を突っ切る一本道。その上を砂塵を巻きあげながら馬車が駆けている。

大地の上には日光を遮る木々はない。初夏の日差しに熱せられて車内はひどい暑さだった。

暑さにうんざりした乗客たちはうなだれて自分の足元を見て、ただ黙っている。それから、ときおり一番後ろに陣取っている一人の風変わりな客のほうに怪訝な視線をちらりと向けては、また足元に視線を移す。

視線を集めているのは一人のそばかす顔の少女。

少女は、この暑さの中にも関わらず、真っ黒なローブに身を包み、頭までフードをかぶっている。小さな体に重そうな背のうが食い込んでいた。そしてそのフードの上には小さな白いヤモリをしがみつかせている。

持ち物も風変わりだった。少女の足元には彼女の腕ほどの長さの刃のついた大きな大鎌が置かれている。その大鎌は不気味な代物だった。

刃は血を思わせる暗い赤色に塗られ、黒い手足が柄に巻き付いており、おどろおどろしく装飾されている。

そばかす顔の少女は不機嫌そうに、膝に載せた肘に頬杖をついて、目つきの悪い顔を外に向け、馬車の外を眺めている。馬車が振動するたびに、ぼさぼさの赤髪と体が揺れた。

馬車の手綱を引く御者の老人は、馬たちの様子よりもこの不審な少女に意識を向けていた。御者はこの道数十年のベテランだ。この街道は冒険者もよく使う。当然、知り合いも多く、彼らがどういった性質かは身を持って知っている。

冒険者というのは変わり者が多い。命を懸けて、危険な森やダンジョンにもぐって生計を立てるのだ。普通の神経を持つものが目指す職業ではない。

——しかし。御者は改めて少女を眺めた。

変わり者が多い、とはいってもここまであからさまに風変わりな者も珍しい。そもそも、職業が分からない。大きな鎌を持ち歩いていることを考えると一見鎌使いにも思える。しかし、ローブの裾から覗くむくんだふくらはぎからは鍛錬しているようには見えなかったし、少女の背丈であの大きな鎌を振り回せるとも思えない。

いったい何者だろう？

そんなことを考えていると、少女から声を掛けられた。

「降ります」

「え？」

「ここで降ります」

御者は驚いた。ここは草原の真ん中だ。冒険者とはいえ少女が一人で降りるような場所ではない。

「え？ お客さんここで降りるの？ 周りに何も無いよ」

「知ってる」

御者には少女が何をしたいか分からなかった。

「体調が悪いのかい？」

と聞いてみるが

「大丈夫。降りる。途中下車してもお金が戻ってこないのも知ってる」と返ってくる。

危ないよと、諭してみたが「大丈夫」「降りる」としか答えず、折れる様子はない。

仕方がない。手綱を強く引っ張って馬車を止める。

すると少女は床に置いていた大きな鎌を持ち上げて馬車から地面へと落とした。ガシャンと大きな音と同時に砂埃が舞う。彼女はそれに気を払うこともなく静かに馬車から降り立った。

「ありがとう」

と素っ気なくお礼を言うと、大きな鎌をずるずる引きずりながら、彼女は背の高い草の影へ入っていく。

御者が馬に出発を命じて、後ろをふと振り返るときには少女の姿は見えなくなっていた。

あの少女はなんだったのだろう。あの姿、どこかで聞いたことがあるような……。

御者がそう考えていると乗客の一人が自分の仲間に話し出した。

「なあ、さっきの目つきの悪いやつ、もしかして『死神』じゃないか？」

「『死神』？　なんだそりゃ」

「なんだ、おまえ知らないのかよ。」

天才魔法使いだよ、ほら、名前はなんていったかなあ」

乗客は老人に話しかけた。

「じいさん、知らないか？」

老人は首をかしげていたが、ぼんと手を叩いた。

体に不釣り合いなほど大きな鎌。いつも浮かべている不機嫌な表情。うわさに聞いたことがある。どうして気づかなかったのだろう。

「――『不機嫌な死神、ユニグエ』か」



「ユニグエさま、どうしてここで降りられたのですか？」

少女が大鎌を引きずっていると頭から声が降ってきた。

ユニグエと呼ばれた少女は、フードの上の声のヌシにトレードマークの不機嫌な表情でめんどくさそうにこたえる。

「なんとなく」

ヤモリはフードから肩に飛び降りてユニグエの顔を横から覗き込んだ。

『『なんとなく』で、こんな草原の真ん中に降りられたのですか？

ヤモリにはよくわかりません」

ユニグエはヤモリから目を逸らした。

「――トイレ」

「トイレですか？　それなら、すぐに済ませて戻れば馬車に間に合ったのでは……」

ユニグエはヤモリが話し終えるのを聞かずに、背のうを地面に降ろ



して、その上にヤモリを置いた。鎌を背のうに立てかける。

「いいの。荷物を見てて」

背の高い茂みの陰に回る。

(ヤモリはやさしいけど、デリカシーがないところある)

心の内で自分の使い魔にため息をつく。

(恥ずかしいからあまり触れてほしくない)

街道から十分離れて自分の姿が草陰に隠れることを確かめてから、

ロープをめぐり上げて、ドロワーズをずりずりと降ろした。

尻がむき出しになる。大きめの白い尻は赤いニキビでぶつぶつになつていた。

少女は小さく息を吸い込んだ。

「んっ」

声が少女から漏れる。

プスっ。

小さくガスの抜ける音が響く。

少女は腰を少しだけ浮かして、しゃがみなおすともう一度小さい肺に空気を満たして、お腹に力をいれた。

「んくっ」

ブウウウっ！ ぶっ。

思いのほか大きい音が草原に響いて、ユニグエは顔を少し赤くした。ロープの上からお腹を擦る。

砂の匂いに混じって、独特の匂いがのぼってきて、ユニグエは顔をしかめた。

もう一度、息を吸い込む。

「んんっ」

ブウウウっ！ おしゅっ。ぶすっ。

空気が尻を震わして抜けていく。

太陽に焼かれた地面の熱気がむき出しの尻に昇ってくる。

「あつい……」

顔をしかめて小さくつぶやく。

思いつきりきんだせいで暑くてたまらない。

ロープの上から膨らんだお腹をさする。

「おならしか出ない……。絶対ウンコだと思ったのに……」

自分の体に不平を漏らしながら、腹の内側に溜まった便とガスを皮膚の上からぐりぐりと撫でた。

ユニグエが草原の真ただ中で馬車を降りた理由、それは彼女の下腹にずっしりと溜まった便にあった。

ユニグエは物心ついた時から便秘がちな体質だった。しかも、彼女の職業は冒険者。安定とはかけ離れた職業だ。依頼次第で、起きる時間も寝る時間もバラバラ。依頼に恵まれずお金がないときは野菜なんて買う余裕はなくて食生活は荒れがちだ。そのうえ、ダンジョンではトイレに行きたくなっても、安全な場所まで我慢しなくてはならない。そうしたことが積み重なって、ユニグエは一週間以上便通が無いこともザラだった。

特に今回の便秘はひどく、もう二週間は出ていない。鼻先に赤いニキビもできてきたし、ささくれもひどい。顔も火照っ

ているし、だるさもあった。少女は一刻も早くお腹をすつきりさせたかった。

そんな彼女が三日ぶりに便意を感じたのが、草原を駆ける馬車の上だった。

ユニグエは迷った。

馬車にトイレはない。トイレに行くには町まで我慢しないといけない。でもそうしたら、せっかくの排便の機会を逃してしまう。この機会を逃したら次はいっ出せるか分からなかった。

馬車を止めて待つてもらおうか、とも考えた。

でもそんなことはできそうになかった。他の乗客もいるのにトイレの為に馬車を止めるなんて恥ずかしい。それに、他の人を待たせている、なんて意識したら、焦ってしまっ出ないだろう。そう考えているうちにも刻一刻と時間は過ぎていく。

こうしているうちにもまた便意が無くなってしまっ、重いお腹を抱えたままになっってしまうかもしれない。そう考えて焦ったユニグエは草原の真ん中で馬車を降りたという訳だった。

息を吸い込もうとして開いた口に、風で巻き上げられた砂埃が入り、砂の味がした。

舌を突き出してべっと吐き出す。

(――絶対出す)

そう決心してずりずりとブーツを草地の上で滑らせて、力をいれやすい姿勢を探る。少女は腹に溜め込んだ便を出しやすい姿勢になろうと、何度も重い尻を浮かした。

やがて、少女は体勢を決めると、唇をきゅっと噛みしめた。

「ふんんっ」

息み声。

ブウっ。ブッ。ブビィっ。

乾いた放屁音が響く。濃厚なガスが熱い砂に吹き付けられる。

「んんんんっ」

ブウっ！

彼女の奮闘も空しく、お尻の穴からは何も覗かない。ただ尻穴が口を開いて、腸内に溜まっていた異臭を熱気とともに吐き出すだけだ。

両腕をお腹に食い込ませて、背中を丸める。顔を地面に向ける。

「ふんっ。んぐっ」

声をあげる。

ブウウウ！ ブッ！

大きな放屁音が響く。

「んぐうううう」

ユニグエは構わずいきみ続ける。

(絶対出すんだ)

放屁音を響かせる恥ずかしさより、今は便意があるうちに出してしまいたい気持ちが上回っていた。

「んんぐっ――」

力を込める。揺れる腿に、ずっしりとした下腹に、めり込ませた腕に力を込める。

ひたすら便を出したくて少女は息む。肩を震わせる。

## 不相应な神童

「それでは今日から座学の試験期間です。午後の実技の時間はなくなります。皆さん三日間。しっかり勉学に励んでください」

講堂の中心で教師がそう言うのと、一番後ろに座っていたユニグエの左隣の生徒たちがひそひそと声をひそめた。

「ねえ、この後町に降りようよ。試験期間に勉強するような奴ならこんな学校に来てないって。どっかの神童サマと違ってね」

「言えてる」

神童と呼ばれた赤髪の少女は小さな肩をこわばらせた。

少女は広げていた教科書を閉じて、背のうに入れる。

少女の名はユニグエⅡシグラリアⅡエンテーテ。この魔法学校始まって以来の秀才で、齡十歳にしてすでに彼女は十五歳向けの授業を受けていた。

後方の出口へと向かう生徒たちの流れをかけ分け、教壇の前に向かう。

「あの、気になることがあって。あとで質問しに行ってもいいですか？」

「いいわよ。ユニグエさんは本当に勉強熱心ね」

教授に午後に質問に行く約束を取り付けに来たのだ。

そのまま前方の出口から出ようとする生徒の列に混ざる。

「何あれ？」

「いつも一番後ろで授業聞いているのに、わざわざ前まで来て質問の約

束してるの、いい子ちゃんのアピールだね。やめてほしいんだけど」

「そうそう。今聞けばいいのに」

陰口が小さい背中に突き刺さる。少女は唇を噛み締めて、袖をぎゅっと掴んだ。

前方の入り口から廊下に出ると、ユニグエ以外の生徒は講堂の出口のある左へと向かっていったが、ユニグエは右に曲がって、薄暗い階段を降りた。

倉庫になっている講堂の一階。人気がない場所をユニグエはまっすぐに歩いていく。その奥に小さなトイレがあった。

トイレのドアを開いて、乱暴に閉める。背のうは荷棚の上に置いた。ドロワーズを降ろして、尻を便座に突き出す。

ブウウウウ！ ブっ！ プビィィィィ！

放屁音が薄暗い個室に響きわたった。

「はあ、お腹張って苦しかった……」

ユニグエはそつと息を吐いた。

小さい手でお腹をさする。

どうやら少女は放屁を我慢していたらしい。すさまじい爆音。少女はどれだけ我慢していたのだろうか。

まだガスが溜まっているのか服の中で腹はへそ下をてっぺんに膨らんでいた。

（今日で三日出てない。お腹張ってる……）

こぼこぼと腹が鳴る。

（まだ、出そう）

ブウウウつ。ふすつ。ブウウウ。

ガスが噴き出る。  
腹をさすりながら息をつく。

「いつも後ろの席なの、仕方ないじゃん……」

ユニグエは不機嫌な顔でそうつぶやいた。

少女はガスが溜まりやすい体質だった。

運動不足、便秘体質、偏食。さまざまな原因が積み重なり、彼女の

腹はいつもガスがパンパンに詰まっていた。

少女は授業のときいつも一番後ろの席を選んだ。我慢できずに漏れ

出したガスを他人に嗅がれるのを嫌ったのだ。

先ほどの質問も本当はその場ですべて聞きたかったが、ガスが我慢できそうになくなり、質問の約束をとるにとどめたのだ。

「さっきも出したのに……。ほんとにお腹張りやすいのやだ……」

少女はため息をつきながら、腹に力を入れる。

ブウウウウ！ ブツ。ぶびいいいつ。

勢いよく噴き出すガスで尻穴が震える。

ブツ。ブビツ。ぶううううつ。

ガスが何度も噴き出した。

放屁を繰り返しても大きな音が出るほどのガスが少女の腹の中に溜まっている。

たっぷり十分かけて腹の中のガスをなんとか追い出すと、ユニグエはきれいなままの尻穴を拭いて手を洗った。

講堂を出る。

学校の大通りを生徒たちが談笑しながら、下の町のほうへと降りていく。皆、町へと遊びに行くらしい。

教授たちのいる学部棟へと石畳の坂道を登っていこうとすると、坂を降りてくる生徒たちに押し戻されそうになる。

ユニグエは石畳から脇の芝生へとあがって、通り過ぎるのを待った。ユニグエが腹の前に抱えた背のうが、膨れたお腹を隠していた。



弱体魔法を専門に教える魔法学校エルグレート。その歴史は古く最初に開かれた七校の一つとされている。岩山の斜面に所狭しといくつもの尖塔が並び立つ姿が美しい伝統のある魔法学校である。ところがここ数年は最近生徒の質の低下に直面していた。

弱体魔法は花型の元素魔法や伝統魔法と異なり、もともと人気のある技術ではない。そのために魔法学校を卒業したという実績だけが欲しい意欲の低い生徒たちが多数を占めるようになってしまったのだ。

学部棟で教授への質問を終えると、ユニグエは図書館に向かった。ユニグエは背のうから教冊を取り出すと、司書に返す。それから、慣れた様子できびきびと本棚の間を歩き、分厚い本をとっていく。

貸出手続きを終えると、背のうに本を入れて、腹に抱えたまま寮へと戻った。

寮の部屋に戻る。特待生であるユニグエには個室が用意されていた。



人に馴染むのが苦手なユニグエにはありがたい待遇だ。

古い建物は底冷えがする。ユニグエは発火魔法で暖炉に火を入れた。背のうをベッドに置き、本を取り出して机の上に積み重ねた。神童と呼ばれる彼女だったが、その実力は才能だけではなく努力によるところも大きい。

ユニグエは本に覆いかぶさるようにして勉強を始めた。

一時間ほど経っただろうか。

ユニグエが椅子に深く腰掛け、そわそわと落ち着きなくペン先を空回りさせていた。

こぼこぼこぼつ。

腸が音を立てる。

あんなにガス抜きをしたのに、便秘中のユニグエの腸にはまたガスが溜まりつつあった。

腹の中に折り曲げられ収められた蛇腹の中で、褒められたものではない腸内環境に生み出された気泡が上へと昇っていく。かき混ぜられてはこぼこぼと音を立てる。

ユニグエは片尻を持ち上げた。

ブウウウツッ！ おつ。おつびいいいっつ。

放屁音を響かせるユニグエ。十歳の少女が部屋でしたと思えない大きな音が部屋中に響いた。

おつ。ぶううう。ぶすうううう。

一回の放屁で収まらないのかガスを噴き出す。部屋に濃厚な匂いが広がった。

「うううう……。やつぱり便秘だからかなあ。テスト前には出さないと……」

ユニグエは腹をさすってから、再びペンを握った。



早朝の魔法学校寮。

誰も起きてきていない廊下の静寂を打ち破らないようにユニグエは共同トイレを目指していた。

特別待遇のユニグエだったが、部屋にトイレはついていない。トイレに長時間かけることが多いユニグエは皆と鉢合わせしないように人の少ない時間帯にトイレに行くのが通例だった。

個室に入ってカギを掛ける。

ブッ。ばすつ。ブビイイイっつ。

便座に尻を乗せる前に誰かに聞かれたら陰口を言われそうな大きな音が響く。寝ている間にユニグエの腹にガスが溜まっていたのだ。小さい尻を便座に乗せる。

「んっ」

いきみ声とともに腹に力を入れられる。

「んぐっ」

小さいこぶしにぎゅつと力を入れるユニグエ。

ふすつ。おつ。ブビツ。

腹に力を入れても尻穴からはガスが漏れるだけで、お目当てのもの

魔法使いお便秘小説誌

## 「不機嫌な死神」

[小説] 灰屋ちゃん

[イラスト] はやん リット Mixa

2024年12月30日 書籍版第一刷発行

発行者：灰屋ちゃん／サークル「灰色ヤモリ小屋」

連絡先：yamori8ihiro@gmail.com

印刷所：株式会社ポプルス

頒布価格／時価

私的利用として許容される範疇を超えて、無断で本書の一部または全部を複製・複写・転載することは禁止いたします。

上記に違反した場合、損害賠償金として金 50,000 円を請求します。

Published by HAIYA 2024 Printed in Japan